

カット。1931年南カリフォルニア州コロムビアにおける家族所得。人俵
1俵=家族数2の2%。白色=白人、黒色=黒人

1. テクノクラシー —— その発生と消滅 ——

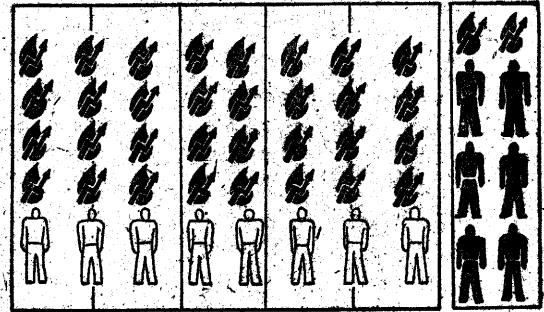
1929年から33年へかけて第一次大戦(1914-18)後最大の世界的恐慌がおそつて、戦後世界の金融支配をほこつていたアメリカ合衆國の産業、經濟の土臺がゆり動かされた。1931年にはフーバー大統領によつてモトリアムの非常措置がとられたが、ついに33年全面的破局がおとづれ、株式取引所の停止、全米銀行の休業にまで事態がおこまれた。

1932年にはアメリカ國民の平均所得は1929年(恐慌直前)の60%にまで減少し、アメリカ有業人口の1/3強に匹敵する1,500萬人の失業者が巷にあふれた。大戦直後の不況を克服するためにとられた産業合理化と、輸入品に對する高率關稅とが、戦後の歐洲市場の疲勞とともに、アメリカ商品の海外市場を萎縮させてしまつたからであるといわれるが、いずれにせよ全世界の金の4割を抱き、購買力のない失業者をかかへて、アメリカ經濟は資本主義經濟機構に對する深刻な反省期を迎えたわけである。

ちようどこのころニューヨークのヘスルド・トリビューン紙がテクノクラシー學說の一部を掲載して人々の注目をあつめた。不況が深刻なだけに、この新しいしかも大膽な學說は、たちまち關心的になつた。コロムビア大學の研究室に據る100餘名のテクノクラット達は、あらゆるジャーナリストによつて包圍された。

「この不況は要するに現在の産業組織の根底となつてゐる價格制度からきてゐる。一切の産業を自然科学者および技術家に支配させ、價格制度に代るに新しいエネルギー手形制度を採用するならば、アメリカ人の25歳から45歳までの成人の週2日の8時間労働によつて1家族平均20,000ドル相當の所得がえられる。これは1929年(アメリカの國民所得の最も大きかつた年)のそれに10倍する量である」と宣言するテクノクラシー學說に市民も資本家も政治家も耳をかたむけた。當然いろいろの批判がでた。「虹色の榮光をもつて現れた輝ける救世主」「共產主義と社會主義の混合物」「アメリカを横行せんとする一個の怪物」とまでいわれた。

しかしこの學說も、世望をになつて白聖館に入つた若き民主黨の大統領ルーズベルトのニュー・ディール政策



アメリカヨーロッパ

極東

第1圖 世界の機械化

長方形1箇面積500萬平方碼。人俵1箇=人口1人、火
燭電光圖形1箇=毎年石炭、石油、水力より發生されたエネ
ルギー量500億kWh。

と、ヒットラードイツの擡頭、日華事變と、ふたたび騒然となりはじめた世界情勢に對處して、固く統制されはじめた國家の形に移行していつたアメリカ合衆國の變化の影に消滅していつてしまつた。もうそのテクノクラシーの名を知る人も少なくなつてゐるかもしれない。

2. テクノクラシー —— その理論 ——

Demo cracy が人民の支配(民主主義)といわれるように、Techno cracy は技術の支配(技術主義)とゆうことができる。しかしこのテクノクラシーの理論には二つの面があるといわれている。それは、

A, 基礎理論とそれに関する實證的、統計的問題

B, 政策論的な主張をふくむ現實的問題

で、テクノクラシーの名は後者(B)にもつともふさわしいもので、當時アメリカで幾多の非難をおこつた主な對象もここにあり、學說としての缺陷と弱點のもつとも大きかつた面でもある。

しかしテクノクラシーの眞價とそれが現代にまでもつ意義は前者の基礎理論にあり、それはあまりにも大きかつた當時の世評の應接にいとまなく、着實にその學的結論を究めなかつたのが惜まれる面でもある。

その理論的基礎になつてゐる概念は、「1人當りエネルギー轉換率」で、一定時において一定社會の享受しうる物質文明(ことに生活水準)の限度は、その社會において單位時間に人間力以外のエネルギーが有用な形態およびサービスに轉換される度合によつて決定される。このエネルギー轉換の度合はその社會の物質文明、ことにその生活水準の限度を決定する基礎的決定素(Basic determinant)であるとされている。これはオストワルドによつて代表される古いエネルギー派の思想にも共通するところである。テクノクラットによれば社會の物質文明の程度はその社會の技術的水準によつて決定されるのであるが、それは技術そのもの 存在形態と社會的關連の複雑さによつてはつきりした決定や比較がなかなか困難である。しかしその技術によつて規定される「社會の動力」(自然界から人間の技術によつて獲得されるエネ

ルギーの總量)の個人的表現になる“1人當りエネルギー轉換率”を用いると、數量的表現でかんたんに社會の物質文明(とくに生活水準)を決定することができるわけである。

こうして社會の生活水準の變化は物理量の變化として定義され、それは量的に測定可能なものになる。

またエネルギーの獲得とその能率のよい轉換は技術に依然するから“1人當りエネルギー轉換率”はその社會の技術の進歩によつて歴史的に變化し、また同時代においても異なる社會間にはその變化が存在している。あるテクノクラットの統計によると、1840年以後、アメリカにおけるエネルギー消費量の増加は、ほぼ時の8乗に比例して増加している。一方人口の増加は時の2乗に比例している。したがつて一定期間内のエネルギー消費量は人口に比し時の6乗に比例して増加していることになる。またエネルギー消費量の増加は、生産の擴大をとともない。それは各産業平均して時の3乗に比例している。したがつて人口1人當りの生産増加は時に比例していることになつてゐる。

しかし現實はそうではない、アメリカ國民は不況にあえぎ、資本家は増大する負債の處理になやんでいる。この邊からテクノクラシーの理論は政策論的な現實感のつよい主張を帯びてくる。「新らしき時期への通路は既往7,000年の靜止的年間(1人當りエネルギー轉換率のほとんど變化のない期間)より傳り來れる社會制度のすべてのガラクタ層によつて封鎖されている」「われわれは今日キロワット時の基礎に立つて生産しているが、一方消費の權利、すなはち貨銀をマン・アワーの基礎において分配している」と述べ、「近代の常識は今や自然科学と技術工学に對し、その支配の領域を擴大せんことを要求しつゝあるのである」として國家經濟における自然科学者と技術家による支配を強調し、價格制度にかわるEnergy Certificates(エネルギー手形)をもつて富の分配の基準にしようとしている。

テクノクラットは繰返しテクノクラシーは純粹な學說であつて政策的主張ではないことを主張しているが、しかしその主な現實的考えはこのように理解される。またこれが當時の人々に豫想以上に強くひびいたのである。技術の進歩と社會制度のそれとが歩調を一にしないために技術的進歩の恩恵を充分に享受しえない人が多いこと

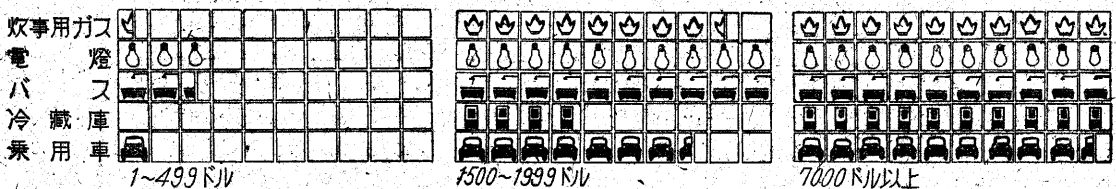
は事實である。しかしそれがただちに現代資本主義經濟制度、とくに價格制度に起因しているとしてそれに代る科學者、技術者の支配を要求する點は、逆に現代技術の上から發生する弊害をただちに資本主義社會の罪として攻撃することと同様に歴史認識を缺いた素朴な主張である。有名な文明批評家マンフォードもテクノクラットの代表的著述である“Introduction to Technocracy”を批評して「この書の政治學的幼稚さと、歴史的無知と事實上の不注意は、いわゆるテクノクラット達の正しき諸結論の信用を害するに大いにあづかつた」といつている。

3. テクノクラシー — その現代にもつ意義 —

われわれの生活がつよく物質的基礎に立ち、しかもそれは社會の生産技術に依存している以上、われわれの生活水準(ひろく文明の全體といつても過言でない)の歴史的變遷と、同時代の異なる社會の生活水準の段差を説明する方法として技術水準の歴史的、社會的變化をとりあげることはもつとも端的な説得力をもつている。テクノクラット達が“1人當りエネルギー轉換率”をもつてその方法の手段とし、その量的な表現をこころみたことは現代においても重要な意味をもつてゐる。この點はわれわれによつて高く評價されてよいのではないだろうか。(たとえその統計的方法、資料の分析においての不備と獨斷が多いとしても)

現在の世界的規模の經濟關係と、朝鮮、佛印などにおけるいわゆる技術的先進國と後進國とのトラブルの發生の原因がアジア全體の生活水準の低さにその重要な原因があると考えられるとき、その種トラブルの本質の正しい認識、解決の方法、さらに將來への對策などについてアジア人と西歐人との間のもつとも簡潔な共通語としてこの技術的水準の比較とゆう問題がとりあげられるべきではないだろうか。いわゆる後進國としてのアジアの人人がいかなる生活状態にあり、いかなる思想をもち、何を望んでいるかを説明するためにはこの技術的クロノロジーのギャップをとりあげることが必要だとおもわれる。生活様式とか、生活状態、風俗風習、藝術などのいわゆる文化的問題をもつてきたのでは、いたづらに問題を混亂させる結果になりやすい。

このような時期に當面している現在のわれわれはテクノクラシーの理論についてよく反省させられるものがある。(1951, 3.10. 村松貞次郎)



第 2 圖 所得額別にみた現代技術の恩恵。(南カロライナ州コロソピア) カットと同じ年代で、テクノクラシー競争のはなやかなあるでござる。その政策論的主張の根底にはこのような現實的問題があつたのだから。全體的な技術水準の向上によつてこの差をなくするか、分配制度の改革によつて平均するか、ここに技術家としてのイデオロギーの分岐點がある。